****
隔週刊「農業文化マガジン『電子耕』」　第 330 号
－環境・農業・食べ物など情報の交流誌－
2012.03.20（木）発行　　山崎農業研究所＆編集同人
＜キーワード＞
環境・農業・健康・食べ物などの情報提供、高齢者と若者、農村と都市の
交流ミニコミ誌。山崎農業研究所＆『電子耕』編集同人が編集・発行。
http://www.yamazaki-i.org
**********発行部数 1190 部**********

□　目　次　□----------

＜巻頭言＞　「農業者大学校」が閉校になった！（上）　塩谷哲夫
＜お知らせ＞　山崎農業研究所所報『耕 No.127』発行されました
＜編集後記＞　“悲しくて・嬉しくて・悔しくて”
――菅野正寿・長谷川浩編著
　　『放射能に克つ農の営み―ふくしまから希望の復興へ』

＜巻頭言＞　「農業者大学校」が閉校になった！（上）

　現在、41 の道府県に公立の「農業大学校」があることは地域の人々に知られているかと思う。それとは別に、国家の責任の下に、44 年もの長きにわたって農業に就く青年を教育してきた機関があったことをご存知だろうか？　それは「農業者大学校」である。

　この学校が平成 22 年 4 月の行政刷新会議の「事業仕分け」によって“廃止”と判定され、去る 3 月 23 日閉校となった。

◇◇◇◇◇◇

　「農業者大学校」は昭和 43 年に農林省の機関として成立され、平成 12 年度までは直轄で、その後平成 23 年度までは国家管理の「独立行政法人」の機関であった。その卒業生は 1,334 名に上り、約 9 割が就農している。

　当初、入学資格を農家の子弟（後継者）に制約していたが、産業としての農業の位置づけが後退して農業の魅力が低下し、また、一般の高等教育を受けられる機会が拡がった情勢の下では就学希望者が集まらなくなっていった。建学

当初の理念（これについては次号で触れる）も形骸化しつつあった。

一方、近年では農家以外から農業を目指す若者が増えてきた。それを反映して、同校は平成 20 年、「（独）農業・食品産業技術総合研究機構」に統合され、つくばに移転してからは、農家出身者に限らず、広く“21 世紀の日本農業を担うリーダー的農業・農村の担い手として意欲のある者（19 歳以上 40 歳未満）”を受け入れることになった。

◇◇◇◇◇◇

その後の 4 年間の就学者はほぼ半数が農外からの希望者であった。また、農家出身者も含めて 8 割以上が大学等の卒業生で、平均年齢も 27 歳と高く、さまざまな産業分野の就業経験者で構成されていた。

したがって、農業とは無関係の道を歩いてきた人が、あえてその道を離れても、人生をかけて“本気”で農業、あるいは農的生活に進みたいと決意して農業者大学校に入ってきたのだから、そのモチベーションの高さは半端ではない。

私はつくばへの移転前から技術科目の講師をしてきたが、明確な目的意識を持って、学ぶことが、こんなにも急速な進歩をもたらすのかと、つくばの学生たちの急成長振りには驚かされた。そして、学生たちは「農」を学ぶのは 1 年生でも、他分野の知識・経験、職業人としての経歴を活かして、「技術」・「業」へと結びつけていく能力がすぐれていた。

学校側のサポートも行き届いていた。「農業経営者育成プログラム」に基づいて、農業へのオリエンテーションから始まって、先輩農業者たちの先進経営体やつくばの農研機構研究チームへの派遣実習、農業経営哲学を学び、少人数ゼミで演習し（2 年間の基本の講義・演習・実習の時間は 2,330 時間）、独立就農へ踏み出せるように行政や農業法人へ働きかけるなどの支援を徹底した。

◇◇◇◇◇◇

その結果、つくば移転後の学生たちの卒業後の就農率は 94％ときわめて高い数字になったのである。（以下、次号へ続く）

塩谷哲夫

山崎農業研究所幹事・東京農工大学名誉教授
yamazaki@yamazaki-i.org

＜お知らせ＞　山崎農業研究所所報『耕 No.127』発行されました

山崎農業研究所所報『耕 No.127』が発行されました。
ご希望の方には雑誌を頒布（有料：1,000 円）いたします。
yamazaki@yamazaki-i.org
までご連絡ください。

目次（抜粋）
《土と太陽と》（巻頭言）
農地の放射能汚染問題の解明◎塩沢 昌
［第 37 回研究所総会・総会記念シンポジウム］
■総会記念シンポジウム「東日本大震災と農業・農村」
(1)東日本大震災による農業インフラの被災状況◎渡邊 博
(2)福島―希望への道筋を探りながら◎戎谷徹也
(3)風評被害を乗り越える経営力を求めて
　―東海 JCO からフクシマ◎照沼勝浩
［特別寄稿］
放射性物質汚染の過度な危険視が農業復興を阻む◎西尾道徳
土壌生成理論・腐植前駆物質による放射能汚染対策の
可能性について◎高味充日児
〈連載〉畦道・赤トンボのナショナリズム［18・最終回］
情愛のふるさと／宇根 豊

＜編集後記＞　“悲しくて・嬉しくて・悔しくて”
――菅野正寿・長谷川浩編著
　　『放射能に克つ農の営み―ふくしまから希望の復興へ』

本書の編著者のひとりである菅野正寿さん（福島県二本松市・有機農業者）は、昨年秋のシンポジウム「原発と有機農業」（2011.10.16）でこう発言された。

「地元の新聞では毎日、多くの農産物の検査結果が詳細に報じられていますが、

ほとんどがND（非検出）です。でも、そのことは中央のメディアは伝えません。とりあげるのは、汚染度の高いごくごくわずかな事例なのです…」

農産物への放射能の移行は、事故当初予想されているよりはるかに低い。それは福島の農業者たちの耕作の結果でもある。カリの施肥はセシウムの作物への移行を抑制するし、有機物の投入はセシウムが土に吸着・固定する量をふやす。また、深く耕すことで、表層のセシウムが大量の土と混ざり、地表の放射線量は低下する。

本書は、放射能の性質を見極め耕し続けることで地域の再建をめざした福島県の農業者たちと彼らを支えた研究者や都市住民や流通の取組みの、この１年のドキュメント＝記録であり、持続可能な未来へ向けての提言の書である。

本書を一読して頭にうかんだ言葉は３つある。それは“悲しくて・嬉しくて・悔しくて”だ。“悲しくて”というのは、やはり、この原発事故は悲しくてならない事故であるということ。“嬉しくて”というのは、土の力が想像していた以上にあることがわかったということ、そして、耕すことの意味が確認されたということ。そして“悔しくて”というのは、もし原発事故がなければ、本書は発行されなくてもよかったはずなのに…ということ、である。

だが、“悔しくて”というのにはもうひとつ理由がある。ほんとうであれば、わたしたち（＝山崎農業研究所）が、このような本を発行してしかるべきであるのにそれが果たせていないこと、このことはやはり悔しい…。だが、これはささいなこと、というよりも蛇足のようなことである。希望の芽を本書から学び、そしてさらに展開すること――これはあとに続こうとする者たちに託されているのだから。

菅野正寿・長谷川浩編著
『放射能に克つ農の営み―ふくしまから希望の復興へ』
コモンズ刊、四六判、並製、288ページ、本体価格1900円＋税
ISBN：978-4861870910
2012年3月11日発売
http://www.commonsonline.co.jp/houshanou_katu.html

2012年03月29日
山崎農業研究所会員・田口　均

yamazaki@yamazaki-i.org

山崎農業研究所編・発行／農山漁村文化協会発売
『自給再考――グローバリゼーションの次は何か』
（発売：2008/11　定価：1,575 円 ）
http://shop.ruralnet.or.jp/b_no=01_4540082955/
たくさんの書評・紹介記事をいただいています。感謝・感謝です。

◎辻信一さん（文化人類学者、ナマケモノ倶楽部世話人。明治学院大学教授）
グローバルの次は何？ ～卒業するゼミ生諸君へ
http://www.sloth.gr.jp/tsuji/library/column64.html
◎戎谷徹也さん（大地を守る会）
ブログ：大地を守る会のエビちゃん日記 “あんしんはしんどい”
「自給率」の前に、「自給」の意味を
http://www.daichi.or.jp/blog/ebichan/2008/12/16/
◎吉田太郎さん（長野県農業大学校教授、執筆者）
キューバ有機農業ブログ 自給再考の本が出ました
http://pub.ne.jp/cubaorganic/?entry_id=1822182
◎関良基さん（拓殖大学政経学部）
ブログ：代替案　書評：『自給再考　－グローバリゼーションの次は何か』
http://blog.goo.ne.jp/reforestation/e/cb22650fa39384bdd22b61440fa81fa0
◎大内正伸さん（イラストレーター・ライター）
ブログ：神流アトリエ日記（3）「書評『自給再考』」
http://sun.ap.teacup.com/applet/tamarin/20081204/archive
◎ブログ：本に溺れたい グローバリゼーションの次は何か
http://renqing.cocolog-nifty.com/bookjunkie/2009/01/post-841e.html
◎森川辰夫さん
NPO 法人 農と人とくらし研究センター／資料情報
http://www.rircl.jp/shiryo.htm
◎日本農業新聞／書評
（2009/01/19 評者：日本農業新聞編集委員 山田優）
http://yamazaki-i.org/
（画面トップの「書評はこちらから」よりアクセス下さい）
◎小谷敏さん（大妻女子大学）
日本海新聞コラム「潮流」／「自給」の方へ（2009/01/31）

http://blog.goo.ne.jp/binbin1956/e/c895f6619b30ba7725e264b4daa75219
◎白崎一裕さん（(株) 共に生きるために）
月刊とちぎ V ネットボランティア情報 vol.158／しみん文庫
http://yamazaki-i.org/
（画面トップの「書評はこちらから」よりアクセス下さい）
◎塩見直紀さん（半農半 X 研究所、執筆者）
ブログ：半農半Xという生き方～スローレボリューションでいこう！
立国集。
http://plaza.rakuten.co.jp/simpleandmission/diary/200812270000/

◎お願い「＜読者の声＞の投稿規定・メールの書き方」

1、件名（見出し）を必ず書いて下さい。「はじめまして」は省略して、言いたいことを具体的に。
2、氏名・ハンドルネームは、文末ではなく始めのほうに。
3、1 回 1 テーマ、10 行位に。
4、ホームページを持っている人は、文末に URL を。
5、JIS X0208 規格外の文字（機種依存文字）のチェックを。
http://www.chem.sci.osaka-u.ac.jp/networks/check/jisx0208.html
インターネットで使えない丸数字や半角カタカナ、括弧入り略号などは文字化けの原因です。

次回　331 号の締め切りは 04 月 09 日、発行は 04 月 12 日の予定です。

＜本誌記事の無断転載を禁じます＞
****
隔週刊「農業文化マガジン『電子耕』」　第 330 号
最新号・バックナンバーの閲覧
http://archive.mag2.com/0000014872/index.html
http://nazuna.com/tom/denshico.html
購読申し込み／解除案内
http://www.yamazaki-i.org
2012.03.30（金）発行　　山崎農業研究所＆編集同人

mailto:yamazaki@yamazaki-i.org
**********ここまで『電子耕』**********